第III章 中学生の性意識

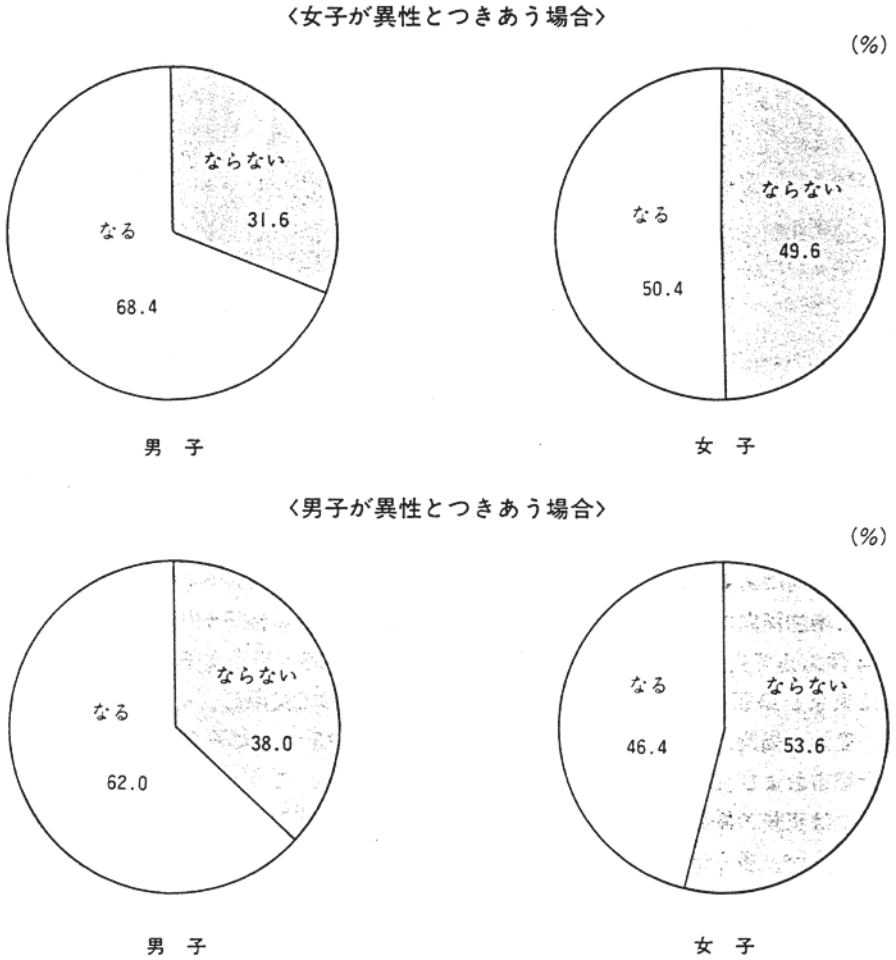
厚生省がまとめた昭和63年「優生保護統計報告」によると、人工妊娠中絶の総数は4年連続して減少傾向にあるものの、20歳未満(15～19歳)は増加傾向にあり、前年より3.8％増、1,054件ふえて史上最高となった。都道府県別では東京を筆頭（2,195件）に、北海道、大阪、愛知、福岡、神奈川、兵庫、埼玉、千葉と、大都市および首都圏に多くなっている。この中には正規の婚姻内のものも含まれているであろうが、多くは未婚の少女たちの性行動の活発化と避妊の失敗によるものと考えられる。

前章までにみてきた(本調査の対象である)中学生は、とくに女子に性的関心が高まりつつあり、雑誌も恋愛や性に関する記事を多読し、友人とも異性への関心の下で相当量の会話をしている様子が明らかになった。また両思いの相手（男子女子ともに）を10％がもち種々の形で交際し、その数値は既報の高校生の男子15％、女子20％に近接する数値となっている。こうした積極的な対異性行動や性的関心の背景には、おそらく高校生の場合と同じように、昔と比較して大きな性意識の変化があるに違いない。本章ではそうした側面でのデータを扱うことにしよう。

1. 恋愛の是非

かつて学業半ばの恋愛、換言すれば、少年少女の恋愛は学業の達成を妨げるものとしてタブー視されていた。「中学生どうしが異性の友人と1対1でつきあうと勉強の妨げになるか」をたずねた図Ⅲ－1によれば、「異性とつきあうこと」に関しては、女子より男子のほうの反応がよりネガティブである。「女子が異性とつきあう場合」に否定的なのは男子68％

（図Ⅲ－1）中学生どうしの異性の友だちとのつきあいは勉強の妨げになるか

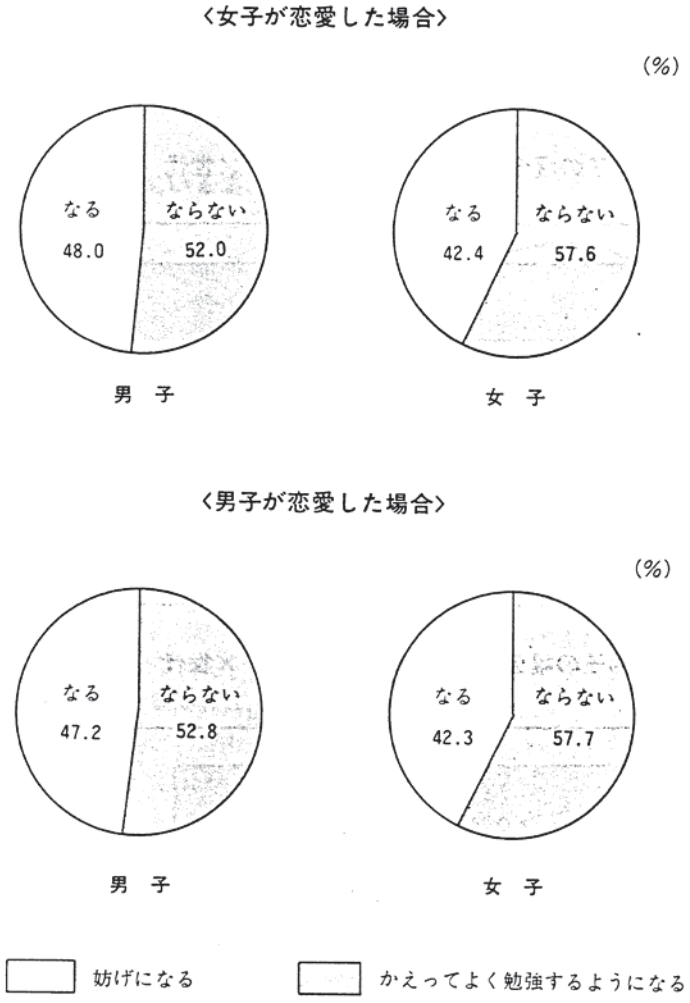


女子50％、「男子が異性とつきあう場合」は男子62％女子46％となっている。これは右側に掲げた高校生の数値とも同じ傾向だが、高校生より中学生の男子のほうが、より「男女交際の勉強への悪影響」を心配していることがわかる。

これを母親の学歴との関連でみた表Ⅲ－1によると、女子の母親間では学歴による差はないが、高学歴（大卒以上）の母親をもった男子は、異性とのつきあいが勉強の妨げになると思っている者が多い傾向が見られる。

また、子どもと母親の実際の反応を世代間で比較してみると、図Ⅲ－2に示したように、母親＞男子＞女子の順序で「妨げになる」とする者の割合が多い。

（付図）高校生どうしの恋愛は学業の妨げになるか



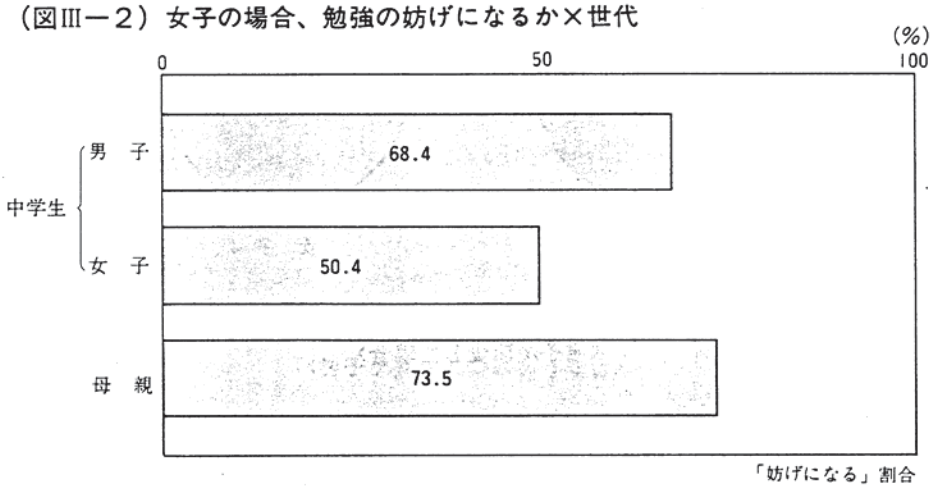
（表Ⅲ－１）中学生どうしの異性の友だちとのつきあいは
勉強の妨げになるか×母親の学歴

(%)

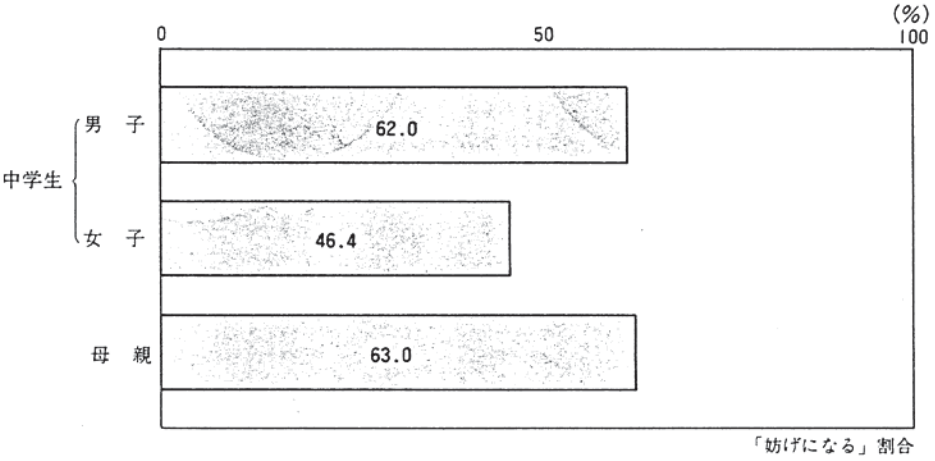
		中卒 高卒	短大卒	大卒または それ以上
女子が異性とつきあう場合	男 子	69.3	53.8	72.5
	女 子	51.4	48.3	49.5
男子が異性とつきあう場合	男 子	59.4	53.2	68.2
	女 子	45.1	45.9	46.7

「妨げになる」割合

（図Ⅲ－２）女子の場合、勉強の妨げになるか×世代



男子の場合、勉強の妨げになるか×世代



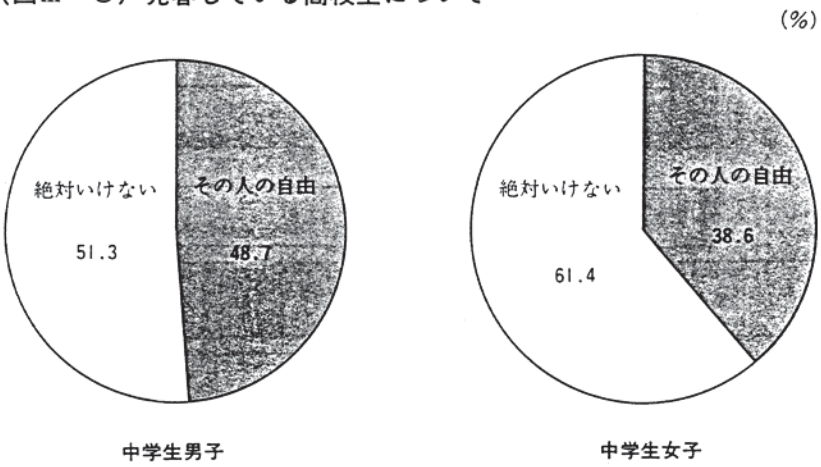
2. 高校生の売春について

性に対する規範感覚の崩れは、しばしば売春への感じ方に現れるとされる。高校生の売春は非行問題でもしばしば扱われるが、既報の高校生の場合も、「絶対いけない」とした者は男子37％女子51％に過ぎなかった。では中学生の場合はどうか。図Ⅲ－3に示したように、さすがに高校生の場合より「絶対いけない」とする者の割合は高く、男子51％、女子61％となっている。また高校生、中学生ともに、女子のほうが売春に否定的である。

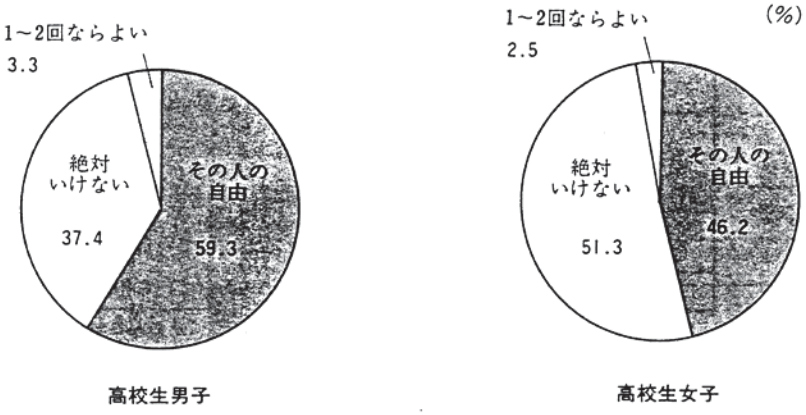
しかし「その人の自由」と答えた者は男子で49％、女子で39％もいる。世代差をみた図Ⅲ－4に示されたように、この数値は日ならずして上昇し、高校生の数値になるのであろう。むろんまだ売春の内容をよく知らないための反応かもしれないが、その数値は大学生よりも高く、気がかりである。

また図Ⅲ－5に示したように、相手をもつ生徒は、そうでない生徒より性に対する感覚がゆるんでくる（売春に許容性が増す）傾向も見いだされる。

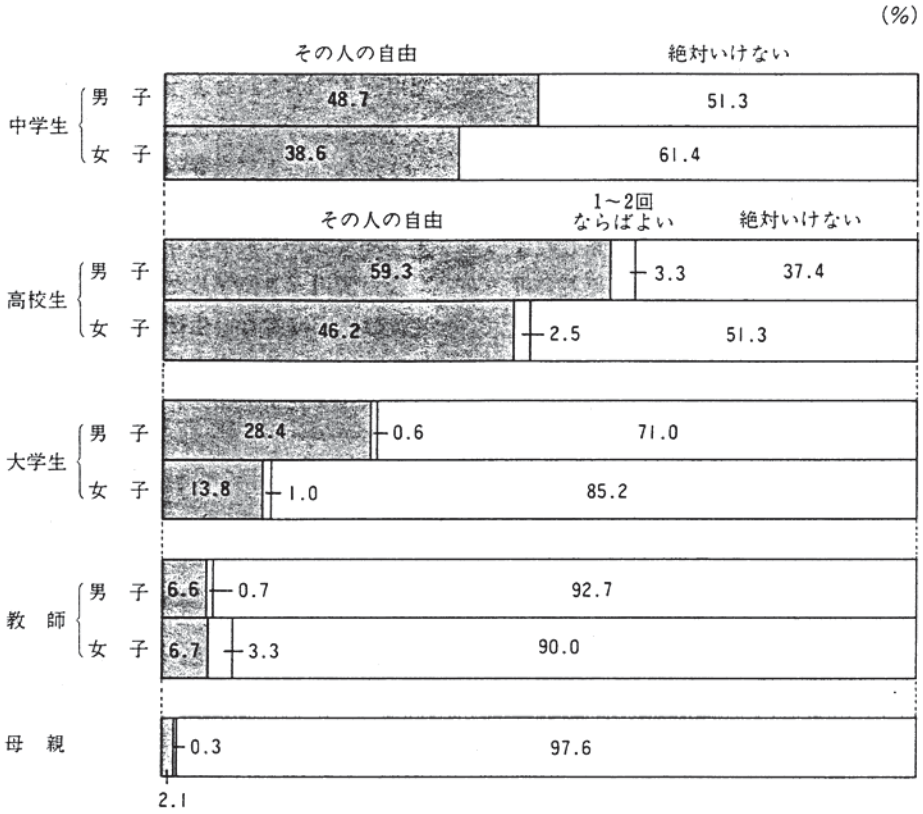
（図Ⅲ－3）売春している高校生について



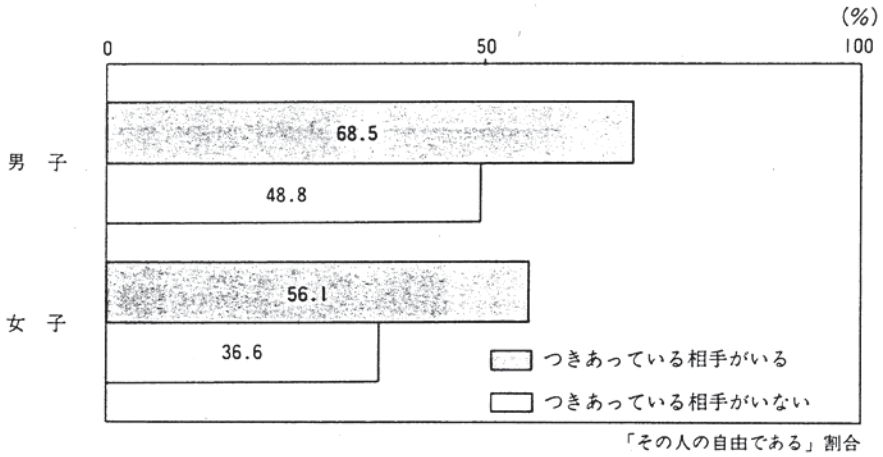
（付図）売春している高校生について（高校生）



（図Ⅲ－４）高校生の売春について×世代



（図Ⅲ－５）売春している高校生について×つきあっている相手

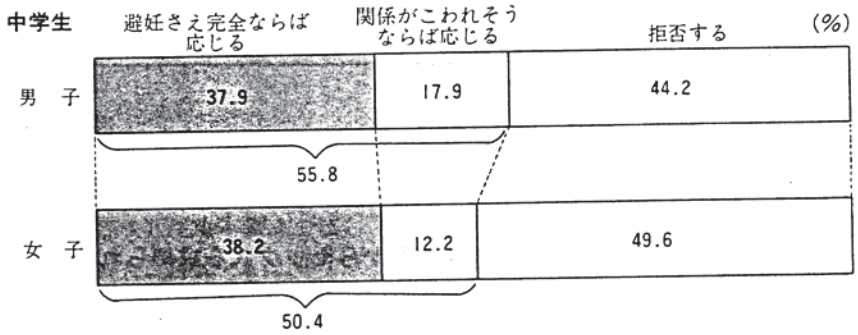


3. 性行動への許容性

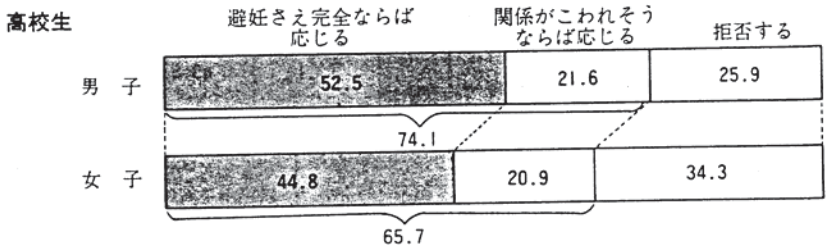
次にセックス、キス、ナンパなどの性に関連した行為への許容性をみてみよう。「女子高校生が好きな人からセックスを求められたら」(図III－6)「避妊さえ完全なら」「断って2人の関係がこわれそうなら」、応じたほうがよいは男女ともに5割強。逆に、「拒否したほうがよい」は4割強。高校生より許容性は低いものの、性に関する規範感覚が中学生の場合にも変化してきていることがわかる。

また自分の場合にも可能性のある行動として、図III－7に掲げた「好きな人からキスを求められた中学生」の場合だと、「応じる」は男子で6割、女子で7割になっており、「断って冷たくされそうだったら」も含めると、8割が「応じる」と答えている。また図III－8に示したように、「見知らぬ人からナンパされた中学生」の場合では、「絶対知らん顔をする」者は男子66％女子69％。3割強が「電話番号くらいなら・お茶くらいなら」、「応じる」と答えている。こうした性的遊びへのレディネスを備える者も、少しの割合だが生まれ始めていることがわかる。学年との関係では、表III－2、表III－3、表III－4に示したように大きな変化はない。表III－2のセックスに対する許容性だけが、男子の場合、3年生になると大きく増加していることが目につく。

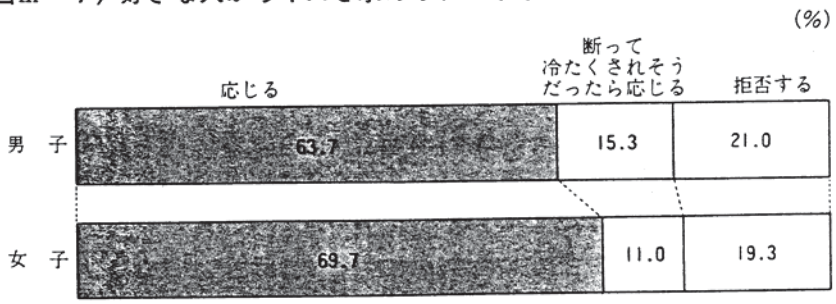
(図III－6) 好きな人からセックスを求められた女子高校生の場合



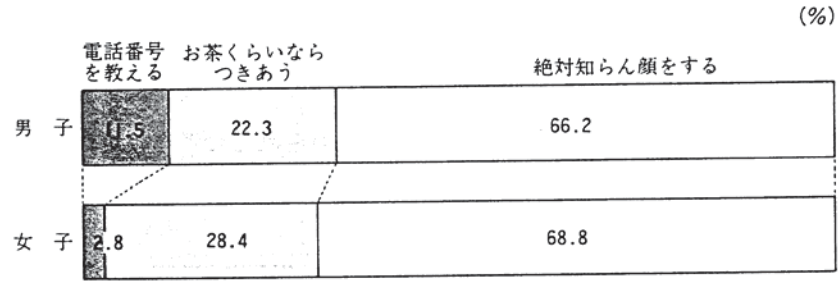
(付図) 恋人から性的な関係を求められた場合



（図Ⅲ－７）好きな人からキスを求められた中学生の場合



（図Ⅲ－８）見知らぬ人からナンパされた中学生の場合



（表Ⅲ－２）好きな人からセックスを求められた
女子高校生の場合×学年

(%)

	2　年	3　年
男　子	47.6	63.7
女　子	51.1	49.8

「応じる＋関係がこわれそうならば応じる」割合

（表Ⅲ－３）好きな人からキスを求められた中学生の場合×学年

(%)

	2　年	3　年
男　子	76.0	81.9
女　子	81.9	79.7

「応じる＋断って冷たくされそうだったら応じる」割合

（表Ⅲ－４）見知らぬ人からナンパされた中学生の場合×学年

(%)

	2　年	3　年
男　子	31.2	36.6
女　子	29.5	32.5

「電話番号を教える＋お茶くらいならつきあう」割合

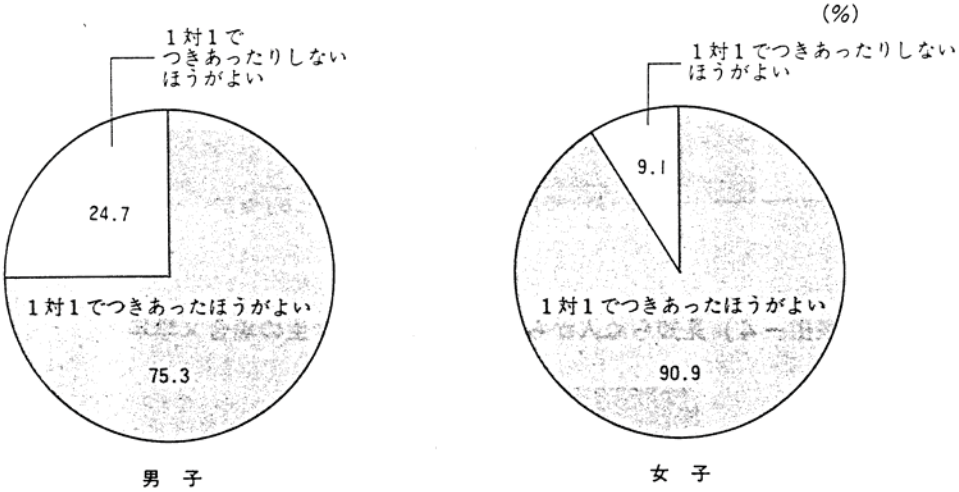
●婚前の異性交際

本来ならここで婚前の性体験の是非を聞きたいところだが、どう工夫しても本調査ではそこまで踏み込めなかった。図Ⅲ－９は、「１対１でつきあうこと」に対する許容性をみたものだ。女子の場合でも男子の場合でも、「結婚前に何人かの異性と１対１でつきあってみたほうがよい」については、女子のほうが積極的で約９割がこれを是としており、男子も４分の３が賛成している。表には示さなかったが、これも男子に限って学年とともに増加しており、男子の場合「つきあったほうがよい」は２年から３年にかけて、70％から83％へと大きく増加している。

また表Ⅲ－５は、成績との関連である。「女子の場合も男子の場合」も成績の悪い男の子たちのほうがむしろ１対１の交際に抑制的なのは面白い。

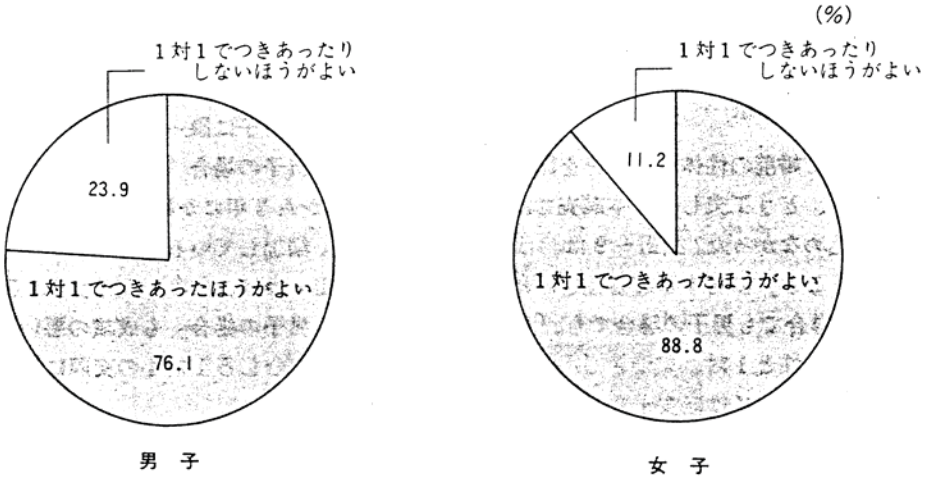
（図Ⅲ－９）結婚前の異性との１対１の交際の許容性

〈女子の場合〉



(1) A．女の子は、結婚するまでは、男の子と１対１でつきあったりしないほうがよい
　　B．女の子は、結婚するまでに、何人かの男の子と１対１でつきあってみたほうがよい

〈男子の場合〉



(2) A．男の子は、結婚するまでは、女の子と１対１でつきあったりしないほうがよい
　　B．男の子は、結婚するまでに、何人かの女の子と１対１でつきあっておいたほうがよい

（表Ⅲ－５）結婚前の異性との１対１の交際の許容性×成績

（%）

		上	中の上	中	中の下 下
女子の場合	男　子	82.0	81.0	74.0	71.0
	女　子	89.3	91.6	91.0	90.7
男子の場合	男　子	80.1	81.0	76.8	72.5
	女　子	87.7	88.5	91.0	87.7

「１対１でつきあったほうがよい」割合
――は最低値

●異性の友だちが家に来たら

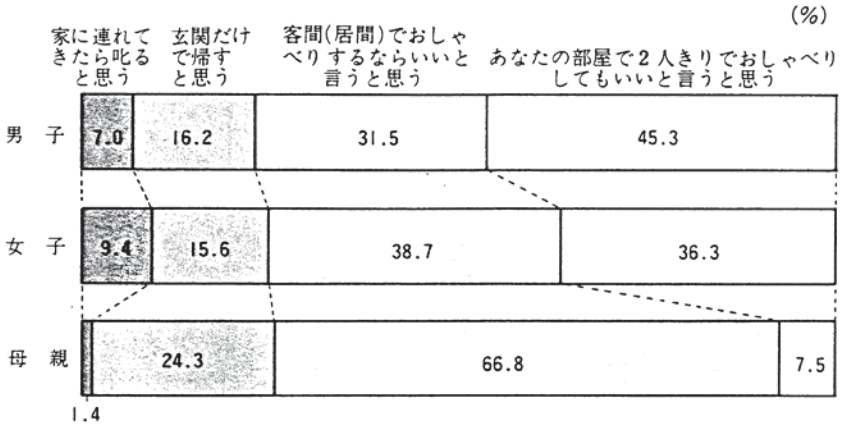
昔は異性の友人と、学校を離れて、地域や家庭に帰って交際することは「親」や「世間」の目があってできにくかった。たとえば異性の友人が遊びにきたら、「ドアを開けておくように」と西洋ではしつけられているという話も聞かされたが、実際は異性の友人が来て家の中に入る機会など、めったになかったように思う。

しかし現在でも、性的な行為の機会は、母親不在の家や個室に２人きりでとじこもることで生じやすいとされる。この点の母親のしつけをみたのが図Ⅲ－10である。「家に連れてきたら叱ると思う」（母親の場合は「叱る」）は極めて少なく、「玄関だけで帰すと思う」（同「帰す」）も生徒側の反応は２割を切っている。

ここでは男子のほうが母親の許容性を大きいものと考え「自分の部屋で２人きり（実際にはおしゃべりしていいという文章を用いた）」を許してくれると思う者が45％、居間（パブリックスペース）ならが32％、女子の場合は男子とは逆に「居間なら」のほうがやや多くなっている。しかし母親の場合の反応は大きく異なり、「２人きりを許す」者はわずか８％に過ぎず、大方が「居間でなら」（67％）である。この点はひょっとするとそうした経験（異性の友人が家に来る）がないため、子どものほうでは母親の態度を甘くみているのかもしれない。

また成績との関連では、成績のよい男子のほうが母親の許容性が大きいと考えている。（表Ⅲ－６）。

（図Ⅲ－10）家に異性の友だちが１人で遊びにきたとき、母親はどう思うと思うか



（表Ⅲ－６）家に異性の友だちが１人で遊びにきたとき、
母親はどう思うと思うか×成績

(%)

	上	中の上	中	中の下 下
男子	53.8	52.6	38.3	43.9
女子	42.4	33.9	33.6	39.6

「あなたの部屋で２人きりでおしゃべりしてもいいと言うと思う」割合
――は最低値

●どんな男女交際がふさわしいか

では具体的に子どもたちは、中学生としてどの程度の男女交際がふさわしいと思っているのだろう。

図Ⅲ－11を見ると「かなりいきすぎ・絶対すべきでない」の数値から、いちばんすべきでないのは「キス」(男子47％、女子40％)、「その子の部屋で2人きりで話す」(同38％、27％)、「夕方、公園のベンチでおしゃべりをする」(同23％、13％)、「喫茶店でおしゃべりをする」(同18％、7％)、「休日に遊びにいく」(同18％、7％)で、あとは、生徒たちはそうした行為の社会的許容の幅を比較的大きなものと考えていることがわかる。また図Ⅲ－12はこれを「かなりいきすぎ・絶対すべきでない」の数値を抜き出しまとめて作図してみたものだ。全体に女子のグラフが短く、逆に言えば、この点に関しては女子のほうに許容性の幅を大きくみる傾向が見いだされる。

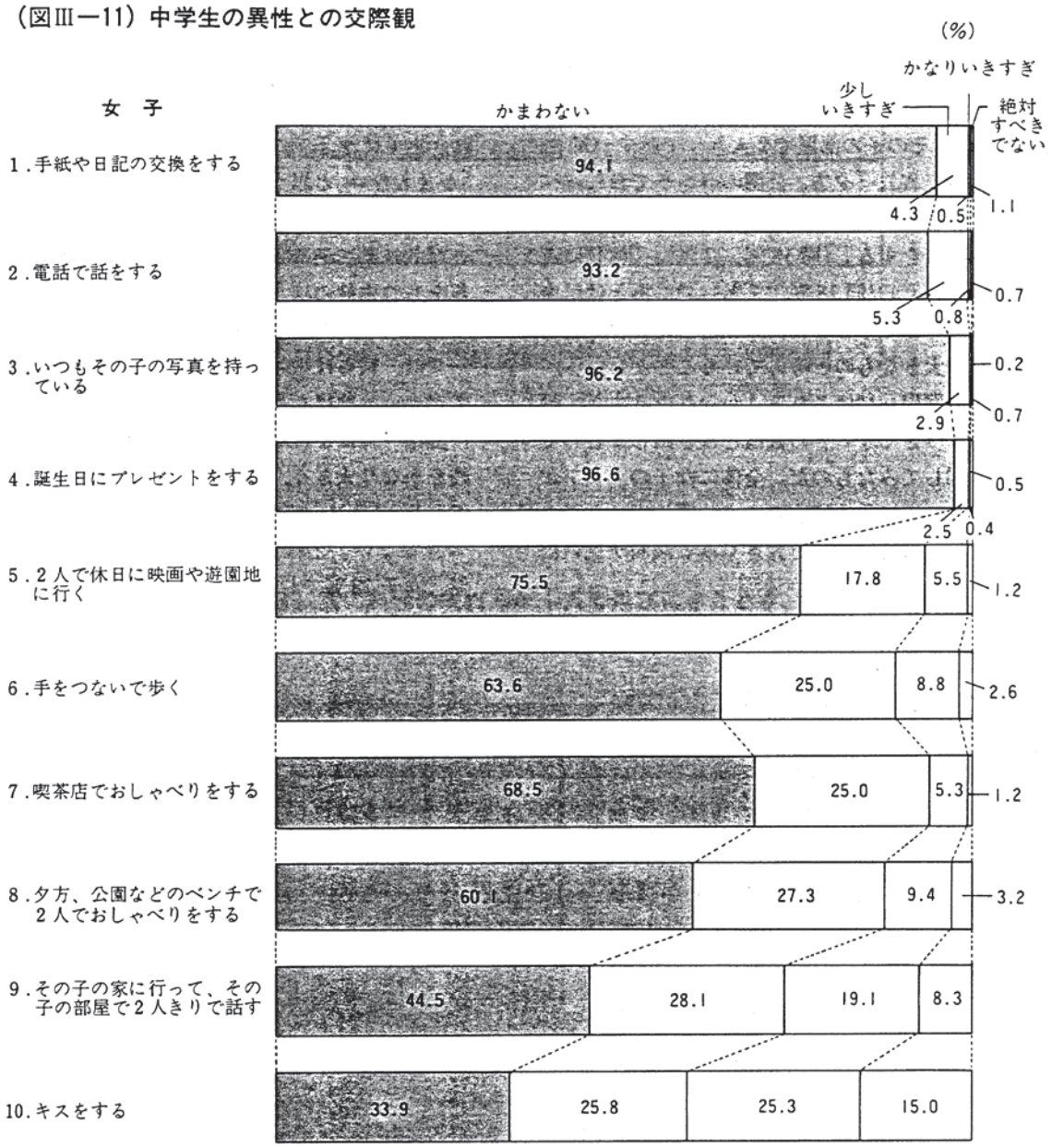
これを学年別にみたのが表Ⅲ－7である。男子は全ての項目で2年生より3年生のほうに「かまわない」の大幅な数値の上昇を見、女子は10項目中7項目でその傾向が見られる。例えば中学生どうしの「キス」を「かまわない」とする者は、男子で25％から43％、女子で28％から39％への上昇が見られる。

ではそうした彼らの意識に母親の学歴はどう影響しているのだろうか。表Ⅲ－8によれば、とくに男子では、高学歴の母親の生徒が、「かまわない」と思う割合が全項目で低い。つまり既存の道徳律を内在化している傾向が見いだされる。逆に女子の場合は、高学歴の母親をもつ生徒のほうが、かえって自己開放的な判断をしていることがわかる。

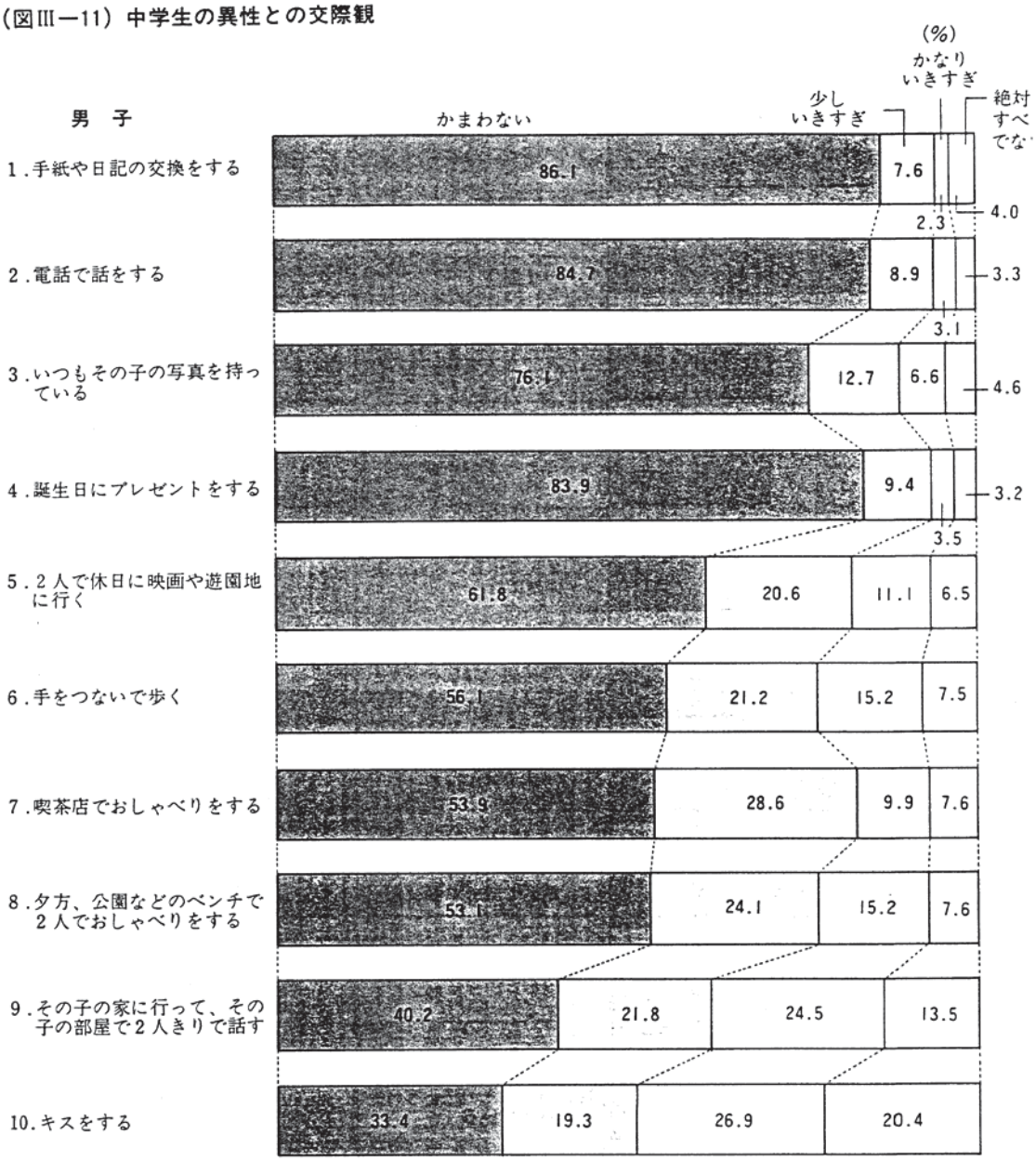
では、彼らは母親に対して、この点に関してどういう態度をもっていると見ているか。

図Ⅲ－13によれば、全体として母親の許容性をかなり大きく、ゆるやかなものと予測しており、「キス」ですら母親の判断を「絶対すべきでない」と推定している者は、男子32％、女子38％でしかなく、「かなりいきすぎだ」を合わせても57％、64％でしかない。

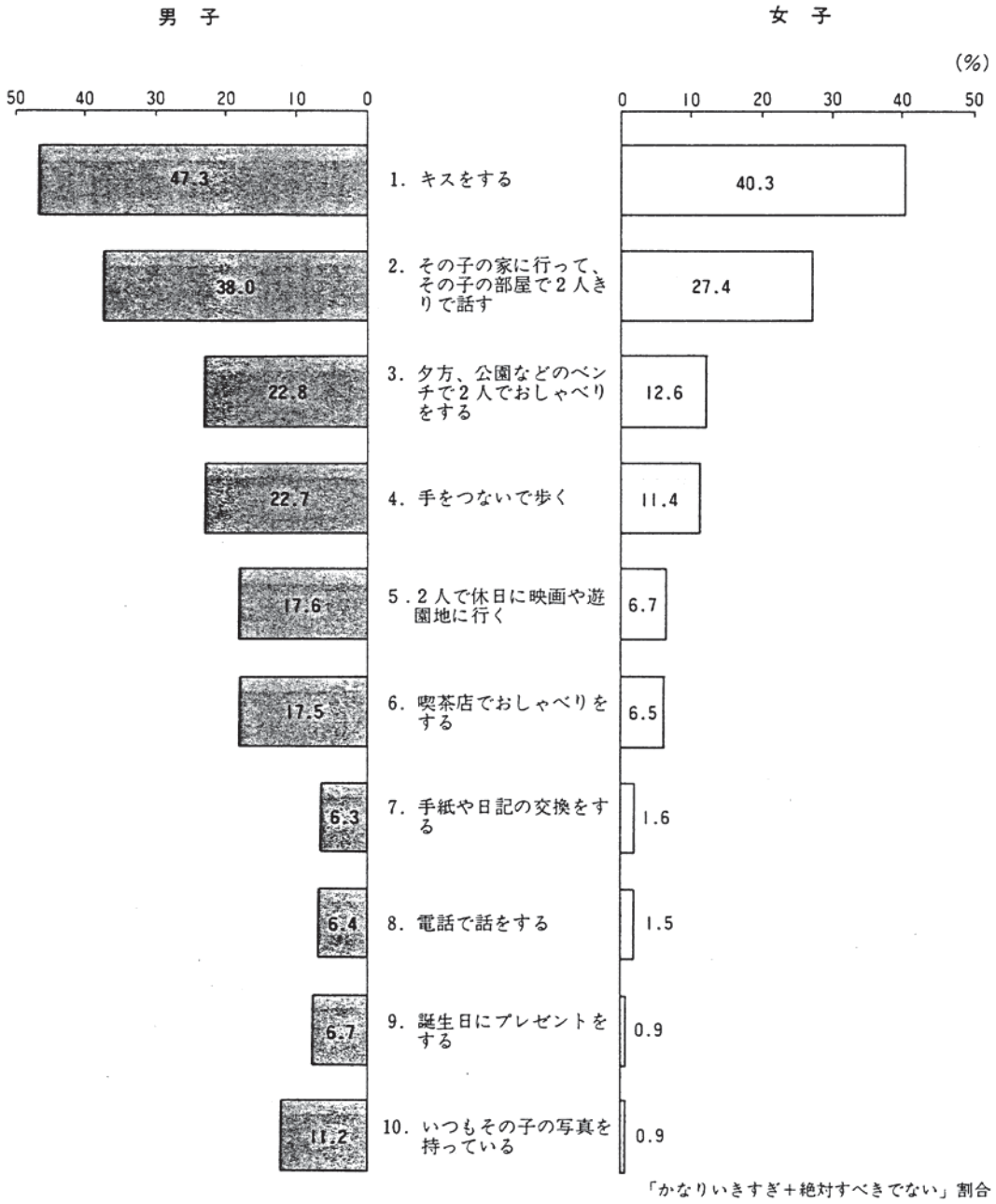
（図Ⅲ―11）中学生の異性との交際観



（図Ⅲ—11）中学生の異性との交際観



（図Ⅲ－12）中学生の異性との交際観



「かなりいきすぎ＋絶対すべきでない」割合

（表Ⅲ－７）中学生の異性との交際の許容性×学年

(%)

	男子		女子	
	2年	3年	2年	3年
1.手紙や日記の交換をする	80.6	91.7	93.6	94.5
2.電話で話をする	78.4	91.0	90.9	95.1
3.いつもその子の写真を持っている	71.0	81.3	98.1	94.4
4.誕生日にプレゼントをする	76.9	91.1	96.6	96.5
5.2人で休日に映画や遊園地に行く	51.3	72.8	68.1	81.6
6.手をつないで歩く	48.4	63.9	58.0	68.3
7.喫茶店でおしゃべりをする	44.3	63.9	60.3	75.2
8.夕方、公園などのベンチで2人でおしゃべりをする	42.3	64.2	53.1	65.9
9.その子の家に行って、その子の部屋で2人きりで話す	32.0	48.8	36.9	50.8
10.キスをする	24.6	42.5	28.0	38.6

「かまわない」割合

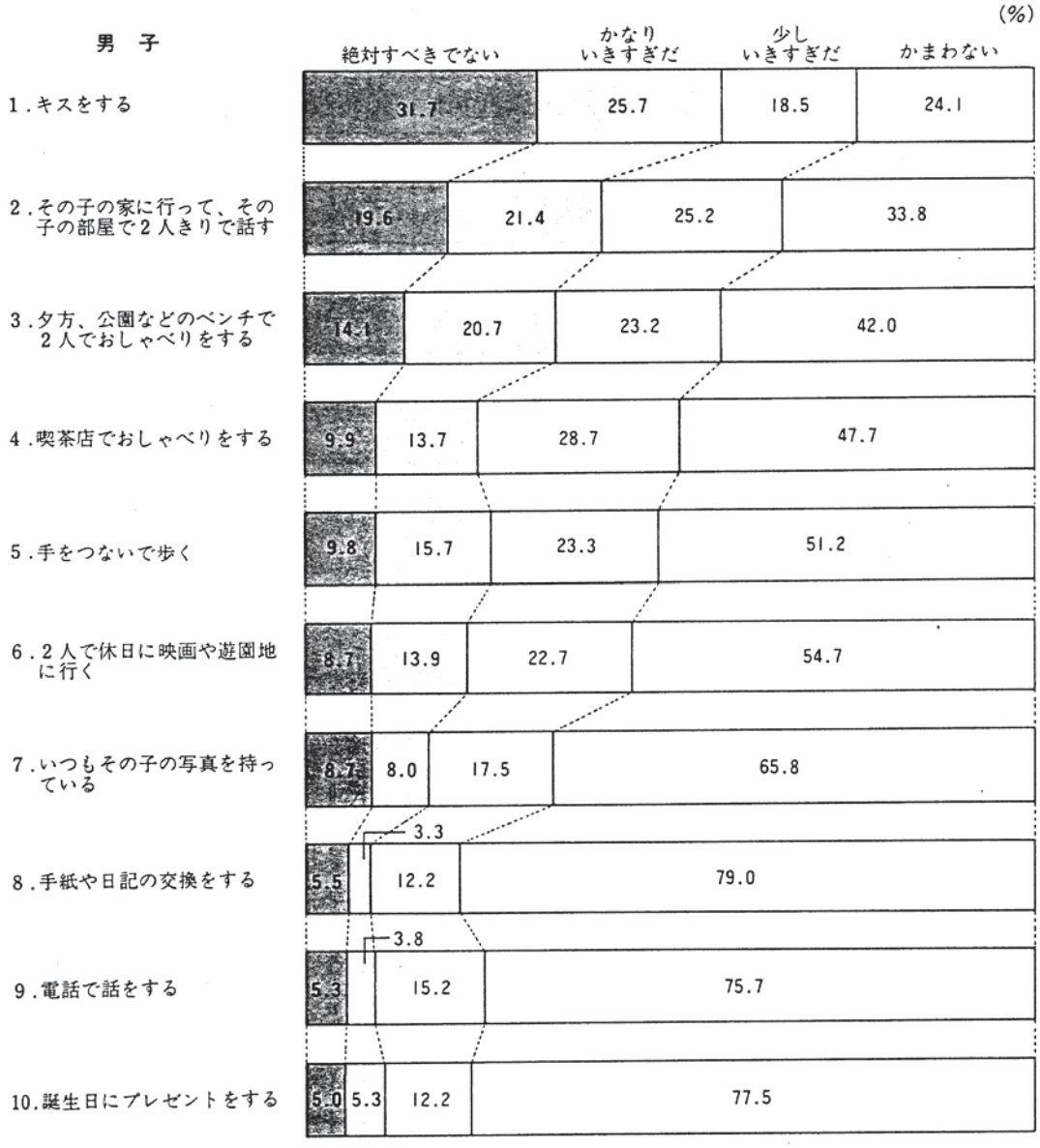
（表Ⅲ－８）中学生の異性との交際の許容性×母親の学歴

(%)

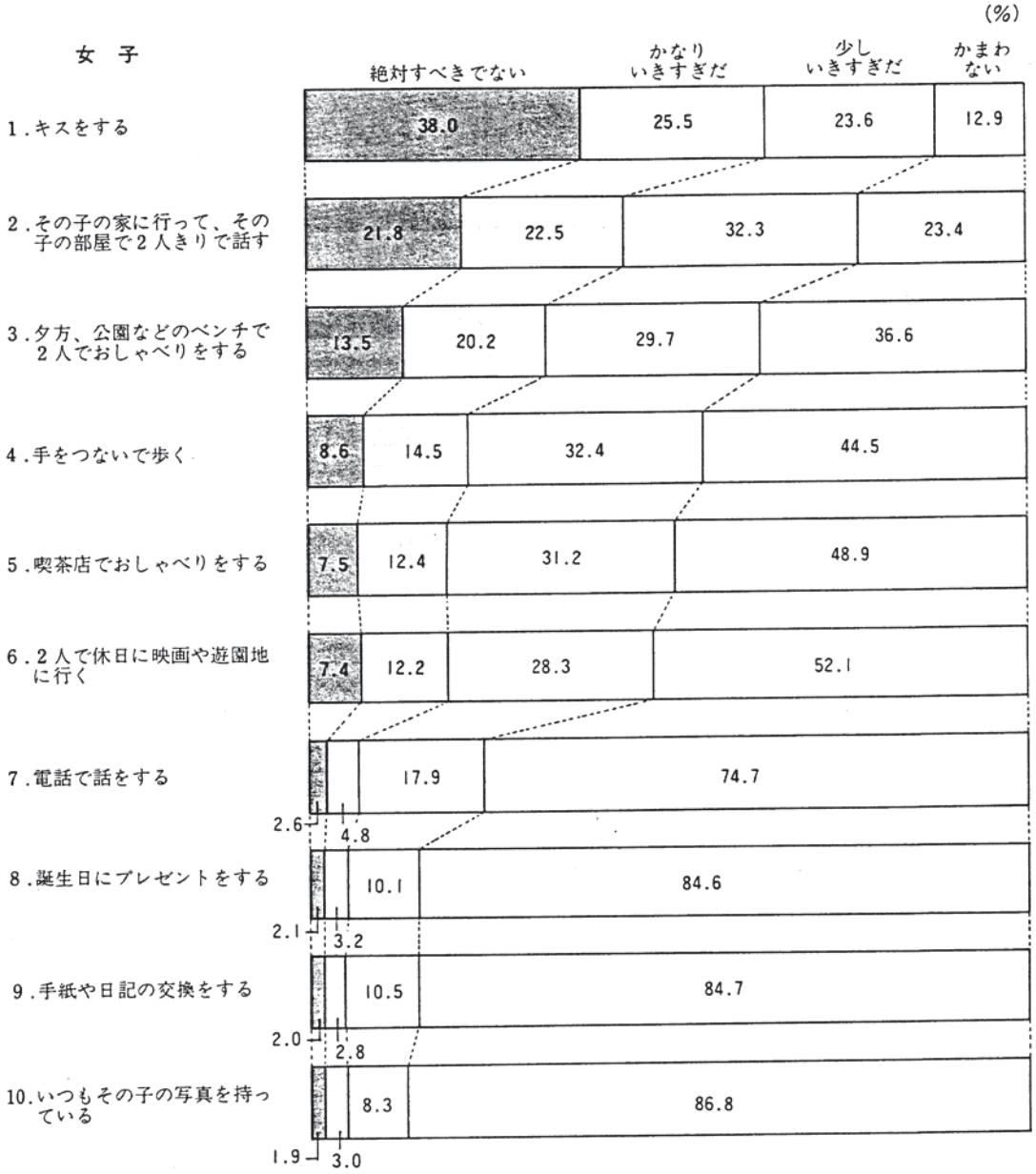
	男子			女子		
	中卒 高卒	短大卒	大卒 または それ以上	中卒 高卒	短大卒	大卒 または それ以上
1.手紙や日記の交換をする	88.7	89.4	83.1	94.1	93.0	92.2
2.電話で話をする	88.7	85.9	83.1	93.6	94.6	90.3
3.いつもその子の写真を持っている	81.5	73.2	68.5	96.2	93.8	95.1
4.誕生日にプレゼントをする	86.6	81.2	84.3	96.6	95.3	95.0
5.2人で休日に映画や遊園地に行く	63.6	62.4	50.6	75.5	71.3	73.5
6.手をつないで歩く	58.8	55.3	47.2	61.5	57.5	65.0
7.喫茶店でおしゃべりをする	55.9	49.4	48.3	67.5	66.4	72.8
8.夕方、公園などのベンチで2人でおしゃべりをする	55.6	54.2	41.6	58.3	57.0	68.9
9.その子の家に行って、その子の部屋で2人きりで話す	42.0	41.2	36.0	40.8	44.2	57.4
10.キスをする	34.3	36.1	33.7	32.3	32.8	39.4

「かまわない」割合
――は最低値

（図Ⅲ－13）中学生からみた「母親の中学生の異性との交際観」



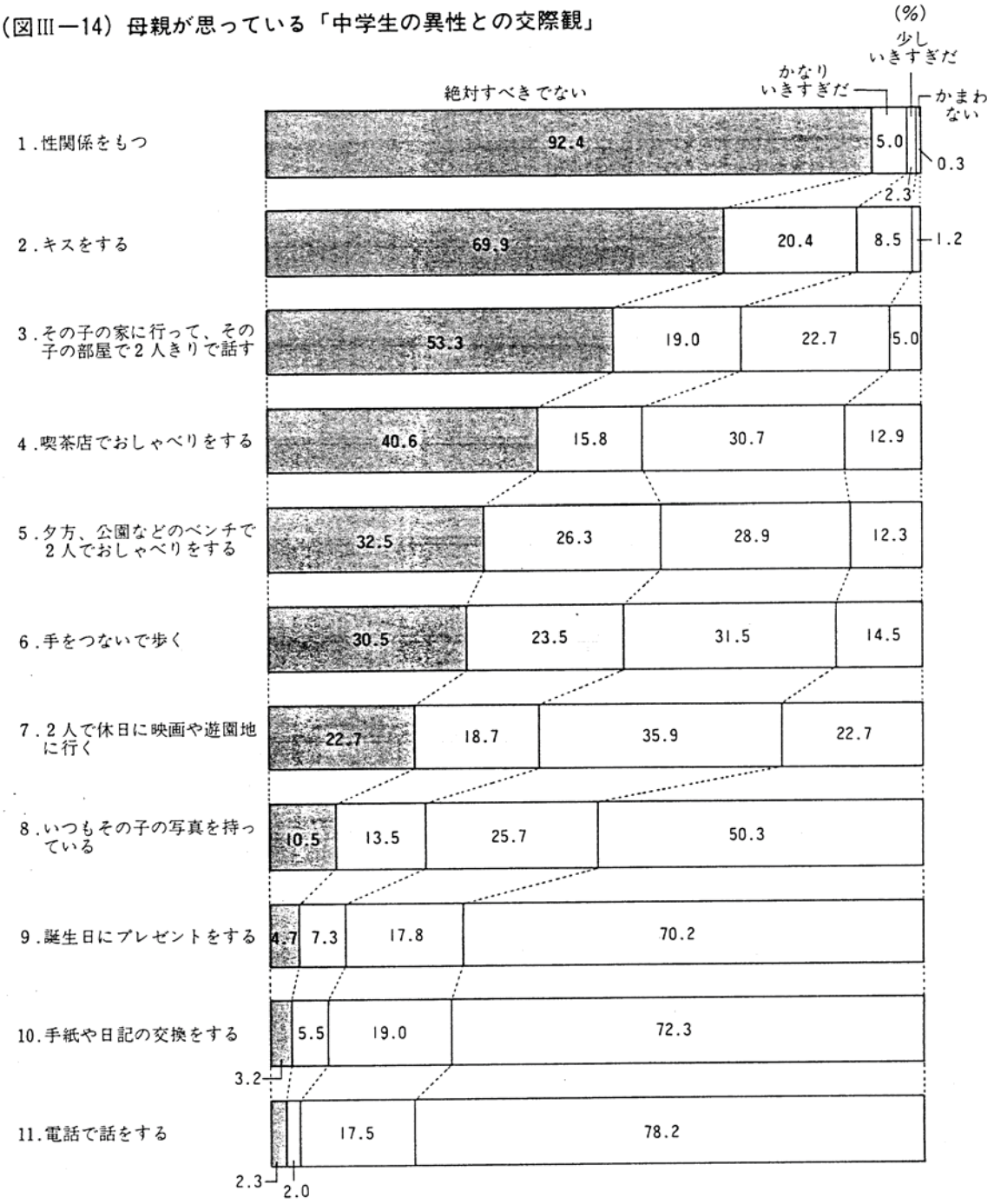
（図Ⅲ—13）中学生からみた「母親の中学生の異性との交際観」



●母親はどう見ているか

では当の母親の交際観はどうか。図III－14は母親調査の結果である。中学生調査の項目には入れられなかった「性関係をもつ」は92％、そして「キス」70％、「その子の部屋で2人きりで話す」53％と、許容性の幅は子どもの予測よりかなり狭い。「休日に遊びにいく」23％、「その子の写真を持っている」11％でもわかるように、ごく何気ないつきあいまで「絶対すべきでない」と考えている人びともいる。

(図III－14) 母親が思っている「中学生の異性との交際観」

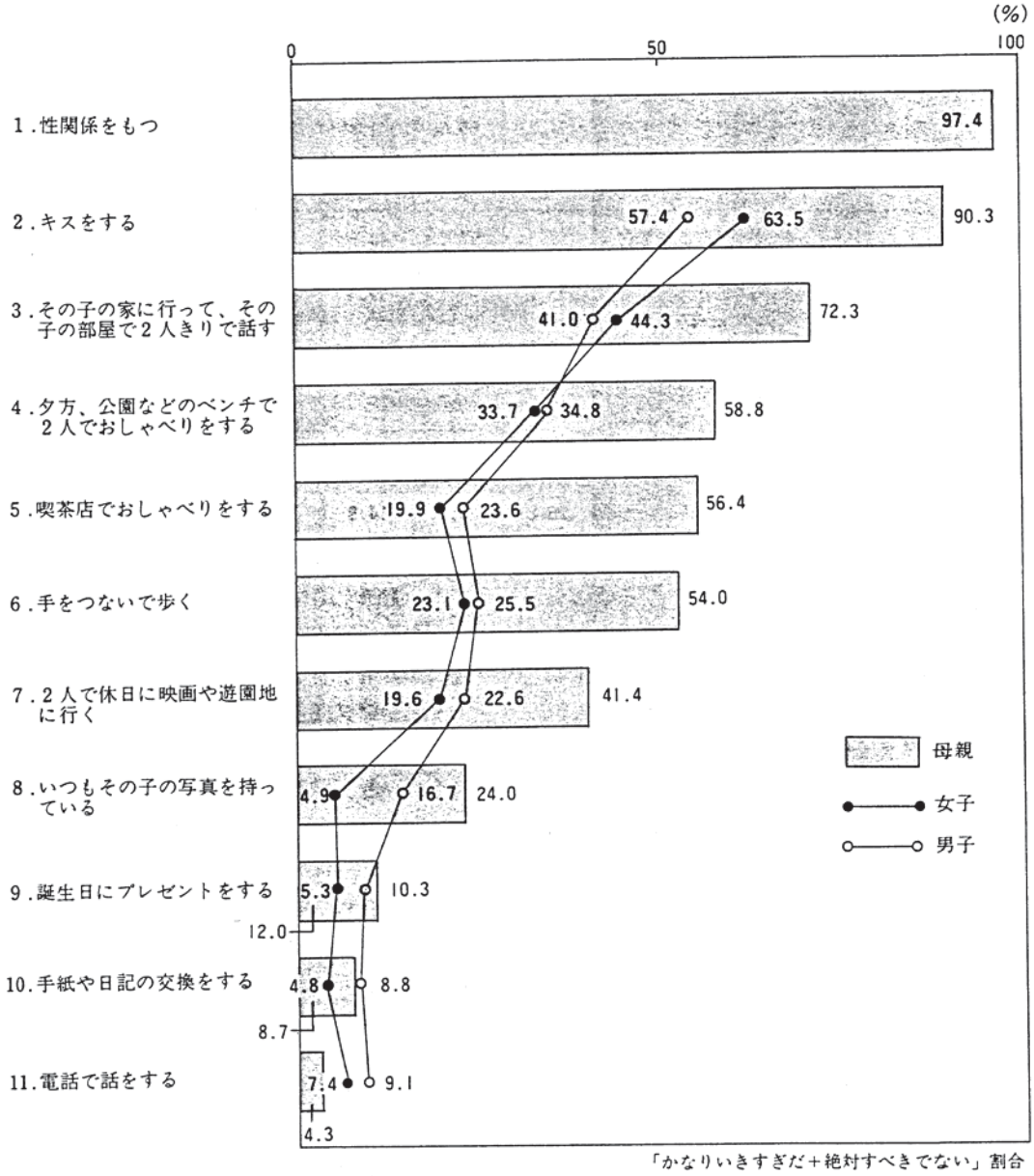


これを生徒と母親の「かなりいきすぎだ・絶対すべきでない」の反応を合わせてみたのが、図Ⅲ－15である。

すでに見てきたように、生徒たちと母親の間には大きな意識のズレがあり、かつ女子と男子の間にも母親の場合ほどではないもののズレがあり、改めてこの年齢の女の子たちの異性への関心が浮かび上がってくる。

また表Ⅲ－9では、母親の学歴との関連をみた。低学歴の母親をもつ男子は、母親の交際許容性を大きいものと見る傾向が見いだされ、女子の場合は（「キス」を除いて）、進んだ交際のしかたに高学歴の母親の場合のほうが許容性が大きいとみる傾向が見られる。

（図Ⅲ－15） 母親の「中学生の異性との交際」の許容性×世代



「かなりいきすぎだ＋絶対すべきでない」割合

（表Ⅲ－９）中学生から見た母親の「中学生の異性との交際」の許容性×母親の学歴

（%）

	男子			女子		
	中卒 高卒	短大卒	大卒 または それ以上	中卒 高卒	短大卒	大卒 または それ以上
1.手紙や日記の交換をする	81.2	81.7	73.9	85.1	83.2	80.6
2.電話で話をする	78.3	73.2	69.0	75.4	74.4	66.0
3.いつもその子の写真を持っている	71.2	65.9	48.3	88.6	83.1	77.5
4.誕生日にプレゼントをする	80.7	76.8	66.7	85.6	81.5	76.5
5.2人で休日に映画や遊園地に行く	57.3	48.8	40.9	50.8	52.8	52.4
6.手をつないで歩く	55.1	47.6	41.4	43.0	38.4	41.7
7.喫茶店でおしゃべりをする	48.8	45.1	36.4	47.1	44.0	51.5
8.夕方、公園などのベンチで2人でおしゃべりをする	45.3	40.7	29.5	36.0	32.3	37.6
9.その子の家に行って、その子の部屋で2人きりで話す	35.6	34.1	25.0	20.3	21.1	29.4
10.キスをする	26.0	25.6	14.8	11.8	13.8	11.9

「かまわないと思う」割合

第IV章　母親の望む性教育

思春期のただ中にいる中学生たちが、日々性的にも成熟への過程をたどり、異性への関心を強めていることは、どの母親もうすうす感じとっていると思われる。昔と違って、性情報がごく身近に散乱し、性的刺激に絶えずさらされているかのような現代にあって、母親たちはおそらく子どもの性的成熟への不安を強めていると思われる。母親は子どもに、いわゆる「性教育」の必要性を感じているに違いない。しかし、それは誰が――具体的には学校に望むことなのか、家庭教育の一環と考えているのか、それとも自然に覚える、と考えているのか。このレポートを終わるに当たって、この点を探ってみることにしよう。

1．学校側に望むこと

図IV－1は、母親が学校側に性教育のどの側面をどの程度望んでいるか、みたものである。

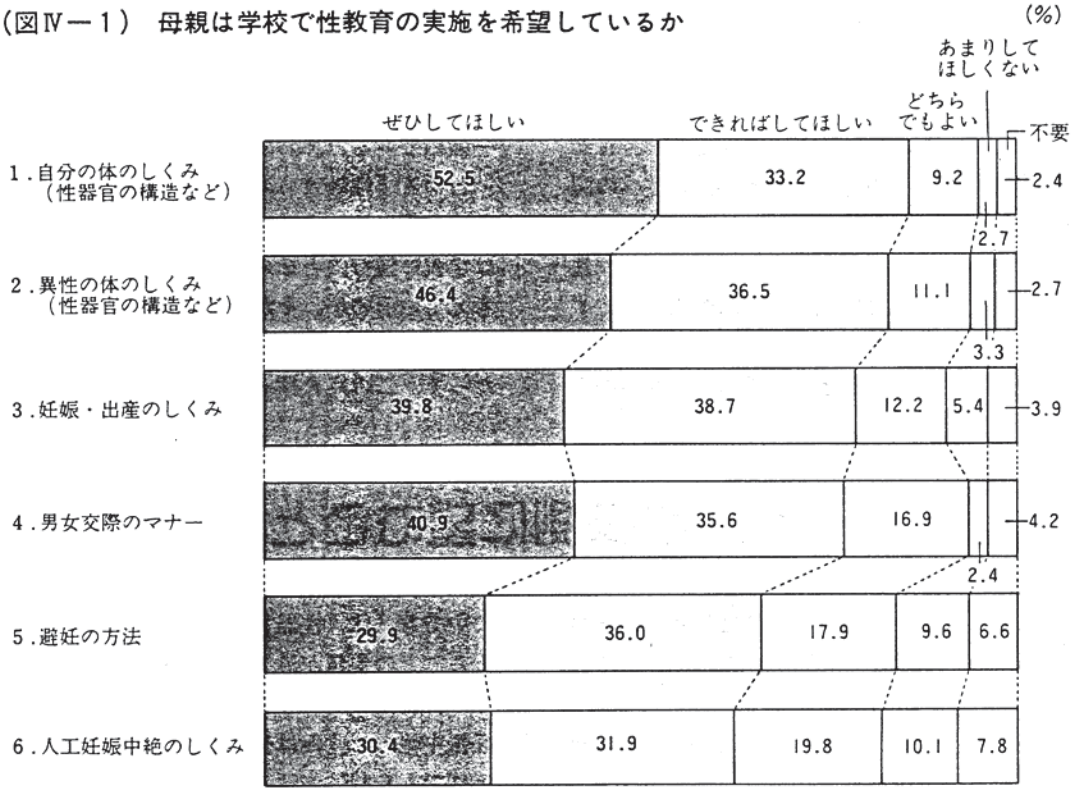
「ぜひ」と「できればしてほしい」を合わせると7割から9割近くに達し、まず学校への依存性が極めて高いことが見いだされる。その中でも「体（性器官）の構造」について教えることの要望が最も高く、妊娠・出産のしくみ、交際マナーと続く。避妊の方法・人工妊娠中絶のしくみはやや希望が減るものの、それでも6割強が望んでいる。「不要・あまりしてほしくない」もこの2項目についてはや

や増加するが、それでも２割には達しない。表Ⅳ－１に掲げたように、「交際マナー」「性器官のしくみ」はほぼ差がないが、「妊娠・出産」「避妊」「人工妊娠中絶」などについては女子の母親のほうが強く希望している。今なお、女子を「まもる性」と考えていることがわかる。性教育は男子にこそ一層徹底的に教えるべきであるのに。

しかし性教育が学校で行われると、父母や生徒の間から必ずしもいい反応が返ってこないことが、しばしば見られる。性教育の内容、教える時期、教える側（教師）の人格や異性観、教師と生徒の信頼関係、(理科や数学、社会、国語などの授業以上に難しい）教育技術(用語の選択、技術)など、どれ一つとってみても性教育は各種の授業の中でとびぬけて難しいものの一つかもしれない。その中の条件がどれ一つ欠けても、逆効果となることすらある。それを危惧してか、学校での一律な性教育に不安を抱き反対する親の存在も忘れてはならないだろう。

この点をみたのが表Ⅳ－２である。図Ⅳ-1で「あまりしてほしくない」「不要」と答えた母親にその理由を聞いてみた。表が示すように「親自身が教える」という積極性をもつ者は10～15％と少なく、「ほうっておいても自然に覚える（寝た子を起こすようなことはしてほしくないという声が、実際にしばしば聞かれる)」が圧倒的である。「先生に教えてほしくない・教える技術が不安」と考える層も、２割前後はいる。ただ自分の「体のしくみ」という理科的知識については、それらがゼロというのも面白い。多少とも人間的な、または性に直結した側面になると反対者や不安をもつ親が出てくる。この点が性教育の難しさであろう。すなわち、「性」を教えることは動物の一つの種であるヒトについて、「いかにその動物性と精神性を統合しつつ、その尊厳を失わずに語れるか」という極めて難しいテーマに挑戦することになるからである。

（図Ⅳ－１）　母親は学校で性教育の実施を希望しているか



（表Ⅳ－１）母親の学校での性教育の希望×子どもの性別

（%）

	女子に対して	男子に対して
1.自分の体のしくみ（性器官の構造など）	86.2 > 85.2	
2.異性の体のしくみ（性器官の構造など）	83.7 > 82.1	
3.妊娠・出産のしくみ	81.1 > 76.0	
4.避妊の方法	71.1 > 60.5	
5.人工妊娠中絶のしくみ	68.9 > 55.2	
6.男女交際のマナー	74.9 < 78.4	

「ぜひしてほしい＋できればしてほしい」割合

（表Ⅳ－２）学校で性教育をしてほしくない理由

（%）

	自然に知るようになる	親が教える	先生が教えるべきことでない	先生の教え方に不安がある
1.自分の体のしくみ（性器官の構造など）	94.1	11.8	0.0	0.0
2.異性の体のしくみ（性器官の構造など）	95.0	10.0	15.0	10.0
3.妊娠・出産のしくみ	63.4	12.2	4.9	9.6
4.男女交際のマナー	95.5	13.6	9.0	9.0
5.避妊の方法	68.5	13.0	9.3	11.1
6.人工妊娠中絶のしくみ	63.3	15.0	10.0	8.3

（複数回答）

2. 相談相手にされない親

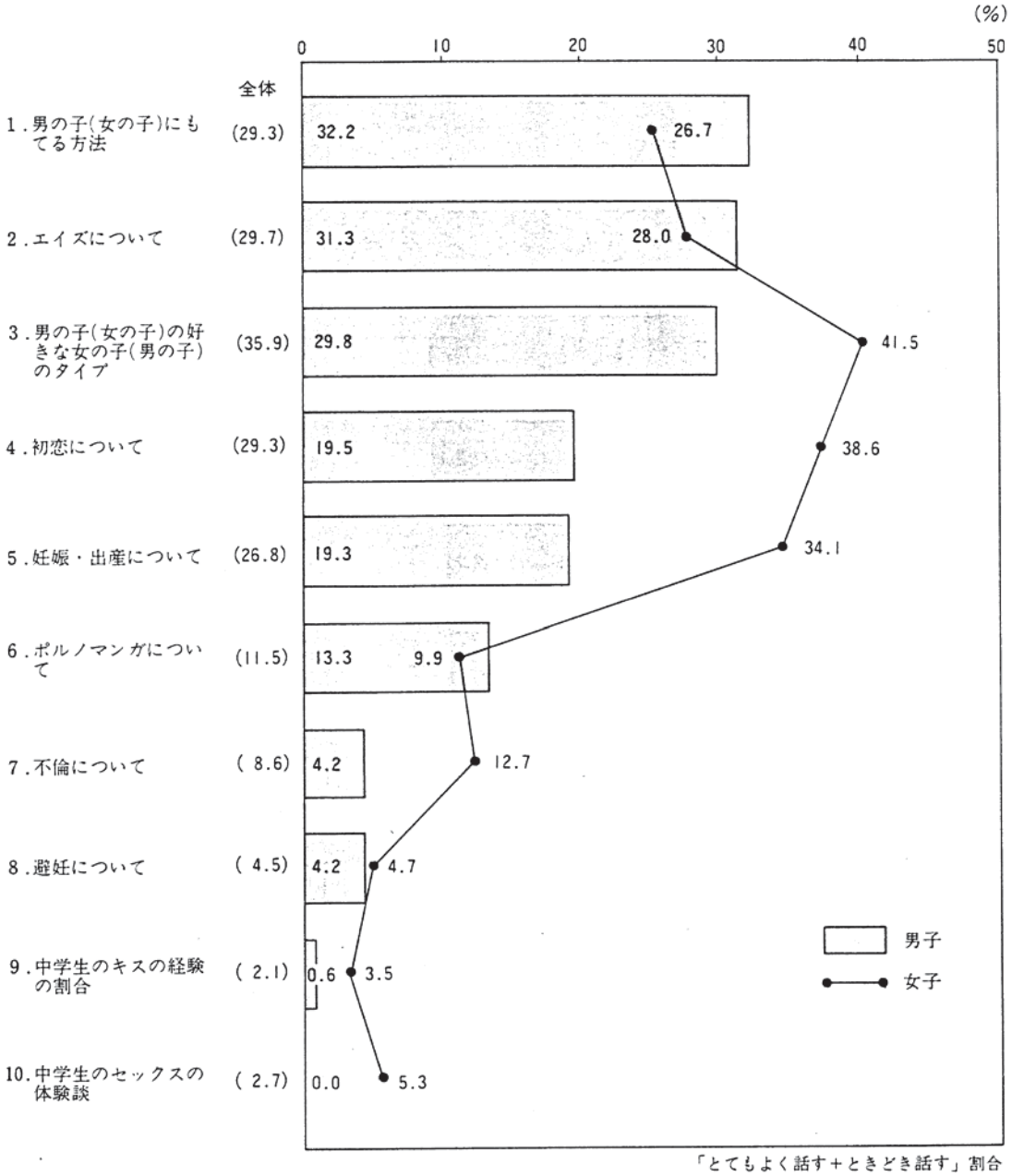
すでにわれわれは第Ⅰ章表Ⅰ-6で、生徒の悩みの相談相手として、ほとんど相手にされていない親の姿を見てきた。わずかに「生理」「性に関する体の悩み」に、女子生徒が母親に相談するだけで、他は「同級生」に相談するか、または全く誰にも相談しないかに、2極分化していた。さしさわりの比較的少ないと思われる「異性との交際」についてすら母親(男子3％、女子9％)、父親(同3％、1％)でしかない。

また図Ⅳ－2は性的な話題を子どもと母親が会話するかどうか見たものである。「とてもよく・ときどき話す」親子は、「異性にもてる方法」「エイズ」「好きな異性のタイプ」など、日常的に語られても違和感のないテーマについてすら3割前後である。性、避妊などの直接的テーマについては、ほとんど話題にされることはないようである。

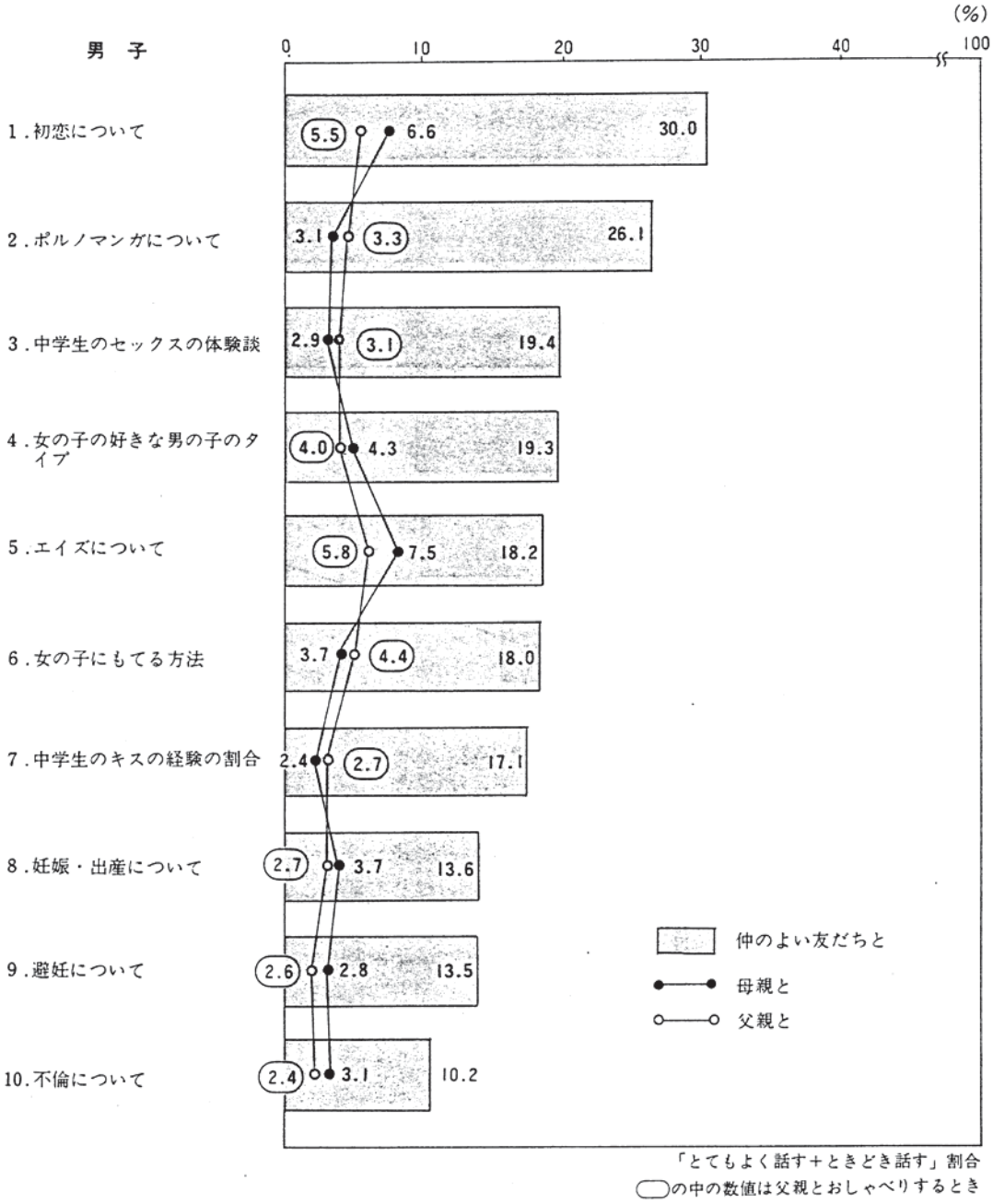
これを、仲よしの友人、父親、母親とで一つの図にまとめたのが図Ⅳ－3である。男子も女子も仲よしの友人との会話量に比べて、問題にならないほどの低い数値を示している。これだけ性情報や性的刺激の氾濫している日常で、この点については、親たちは子と向き合う仕事を回避しているかのような状況が見られる。

性教育をいつ、誰が、どこで行うべきか、改めて考えてみなければならない時期がきていることを、痛感する。

（図Ⅳ－２）母親の性的な話題の会話量×対象

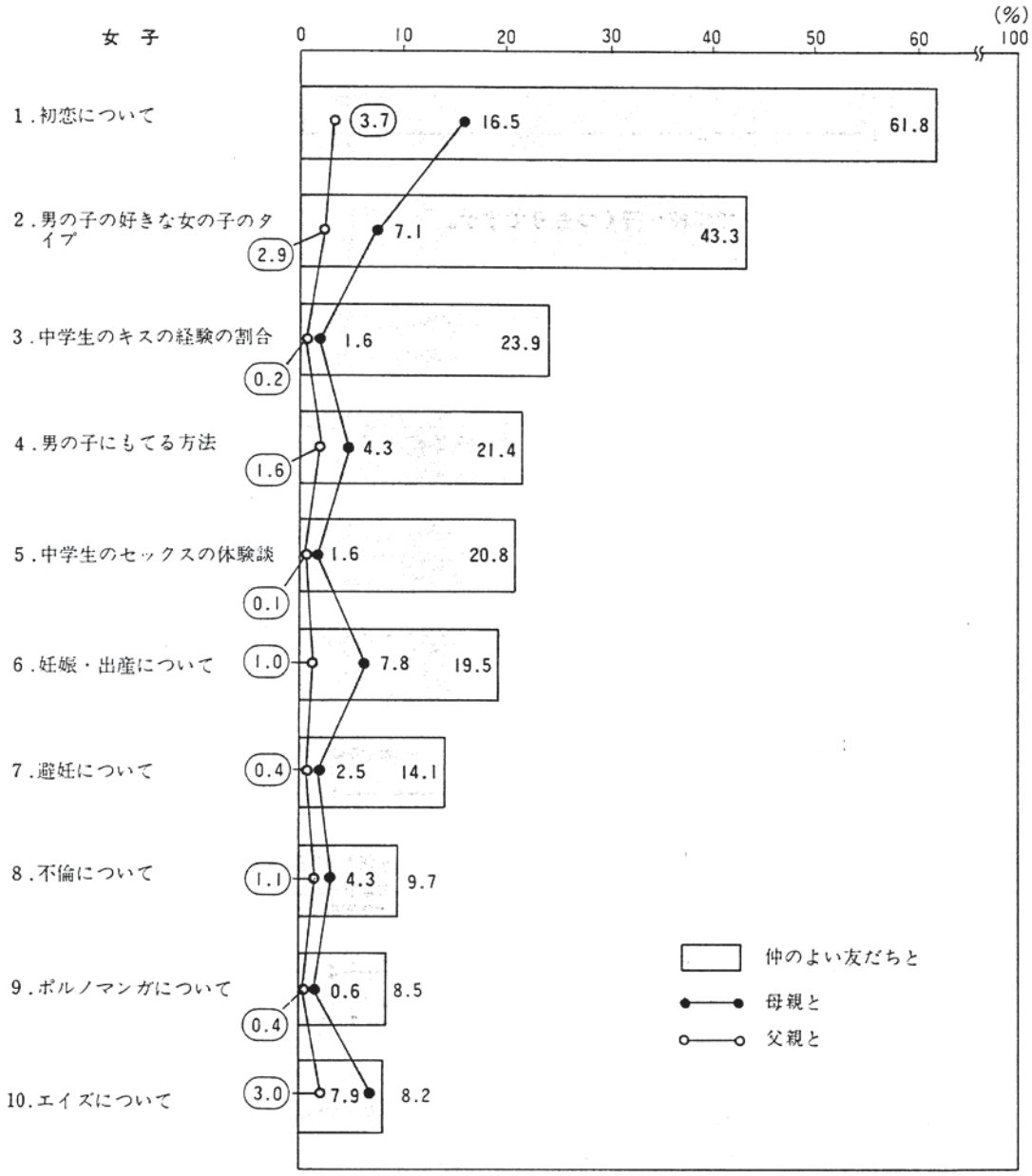


（図Ⅳ－3）性的な話題の会話量×対象



「とてもよく話す＋ときどき話す」割合
◯の中の数値は父親とおしゃべりするとき

（図Ⅳ－３）性的な話題の会話量×対象



「とてもよく話す＋ときどき話す」割合
◯の中の数値は父親とおしゃべりするとき